

NLP2026 Word テンプレートサンプル文書

佐藤□□□¹ 鈴木□□¹ 高橋□□□² 田中□□□□⁴

伊藤□□□^{1, 3, 4} 渡辺□□□□^{1, 3, 4}

{sato, suzuki, ito}@example1.jp takahashi@example2.jp

{tanaka, watanabe}@example3.jp

概要

NLP2022 より、読者の論文理解を促進するため、所定のフォーマットの一部として投稿論文の概要を記載することにした（NLP2021 までは概要は記載する必要がなく、ほぼ全ての論文で概要が存在しなかった）。分量の目安は日本語／英語ともに「8~13 行」とする。概要が 8~13 行を満たさなくても賞選考対象外や不採択になることはない。ただし、極端に短い／長い概要にならないように留意すること。日本語の場合は、文書クラスにより一行 23 文字に設定されているため、161 文字から 299 文字相當になる。

1 はじめに

この文書は、言語処理学会年次大会への投稿論文を作成する際のインストラクションである。NLP2021より、賞選考コストの削減の観点から、投稿論文のフォーマットを規定する。そのため、規定のフォーマットを満たす年次大会論文投稿用文書クラス（*LaTeX*版）およびテンプレート（*Word*版）を配布する。この文書自体が当該年次大会論文投稿用文書クラス・テンプレートを用いて作成されている。よって、この文書を参考に投稿論文の原稿を作成することを推奨する。なお、*LaTeX*版文書クラスでの原稿作成を推奨する。

1.1 LaTeX 版文書クラス

LaTeX 版は、W3C により策定されている『日本語組版の要件』[1]に準拠することを目指す `jlreq` クラスをベースにしている。ただし、本文書クラスでは紙面スペースの都合上、余白値をかなり詰めるように設定している。例えば、行間は外国人参政権のようにルビを振れる最小限の余白に設定してある。

自然言語処理分野の論文では、単純なテキストのみならず、しばしば数式

$$P(B|A) = \frac{P(A|B)P(B)}{P(A)}$$

や箇条書き

- 第1の項目
 - 第2の項目

といった構造も用いられるが、LaTeX版ではこれらもよく知られた文書クラス（例えば `jsarticle` 等）と同様のシンタックスで利用できる。

LaTeX 版文書クラスの仕様の詳細については README-latex.md を参照されたい。

1.2 Word 版テンプレート

Word 版テンプレートは、前述の LaTeX 用に定義された文書クラスに準拠して作成されている。Word 版でも、数式や箇条書きなどは Word 上の機能を用いて挿入することができる。

LaTeX 版文書クラスでの禁止事項および Word 版で投稿される論文が満たすべき規定については、2 節および 3 節に詳述する。

1.3 クレジット

LaTeX 版の文書クラス (`nlp*.cls`) は、東京大学宮尾研究室 朝倉卓人氏のご厚意により年次大会用に提供していただいた。

また、Word 版のテンプレートは LaTeX 版のフォーマットに従って理化学研究所 吉野幸一郎氏により作成していただいた。

2 投稿論文の必須要件

投稿論文に関する規定には、必ず満たさなければいけない「必須要件」と、賞選考のために満たすこ

とを前提とする要件の 2 種類がある。本節では、必ず満たす必要のある「必須要件」について述べる。

1. 原稿は本文は 4 ページ以内、本文と謝辞・参考文献を含めて 5 ページ以内、付録は独立した 1 ページ以内

2. 各ページの余白は上下 3cm、左右 2cm 以上
1 に関しては、本文と謝辞・参考文献を合わせて 5 ページの原稿を投稿することができるが、5 ページ目に本文が入ってはいけないことを意味する。また、本文および謝辞・参考文献とは別に、著者が望む場合は付録 (Appendix)ⁱ を 1 ページつけることができる。つまり、最大で 6 ページの原稿を投稿することができる。なお、謝辞は参考文献のページに含めてもよい。つまり、本文だけで 4 ページをフルに使い切り、残りの 1 ページで謝辞+参考文献を記載することができる。いずれにしても、本文+謝辞+参考文献で最大 5 ページであり、本文は 4 ページを超えることはできない。

2 に関しては、投稿論文に含まれる全てのページに対して余白の規定を満たす必要がある（付録も含む）。

本節記載の 1 および 2 の要件を満たしていない場合は、不採択となる可能性がある。投稿時には十分に気を付けて投稿すること。

3 投稿論文の体裁

2 節冒頭で述べた通り、論文の体裁に関する規定には、必ず満たさなければいけない「必須要件」と、賞選考のために満たすことを前提とする要件の 2 種類がある。本節では、「賞選考のために満たすこと」を前提とする要件」を述べる。

賞選考コストの削減の観点から、投稿論文のフォーマットを規定する。その詳細を本節に記載する。規定フォーマットに明らかに従っていない場合は、**一部の賞の選考過程から除外されることがある。**

ただし、賞選考のコスト削減の観点から生じた施策なので、本節に記す規定フォーマットを満たさない原稿であっても、前節の必須要件が満たされていれば**投稿論文が不採択となることはない**。

3.1 本文

LaTeX 版 文書クラスが定義する以下についての変更は禁止とする（各項目の規定サイズについて

ⁱ 付録に関しては 3.7 節を参照のこと。

は Word 版の値を参照のこと）。

- 用紙サイズ
- フォントサイズ
- 欧文フォント（利用するフォントによって文字数に異なりが生じるため）
- 余白の大きさ
- 行間ⁱⁱ、行数、文字数（特に baselinestretch を変更しないこと）→1 ページの行数は 45 行、各行の文字数は全角 23 文字である。

Word 版 LaTeX 版で定義された文書クラスと同等のテンプレートを実現するため以下のようない定義を行っている。これらの設定を変更することは禁止とする。

- 用紙サイズは A4、組版は 2 段組とする。
- フォントサイズは以下のように定める。
 - 論文表題: 16pt
 - 著者名: 10-11pt
 - 大見出し: 14pt
 - 中見出し: 12pt
 - 小見出し: 11pt
 - 本文: 10pt
 - その他本文中の数式などの文字: 10pt
 - 図表等のキャプション: 10pt
 - 上記以外のクラス、例えばアルゴリズムなどを記述する場合の文字: 10pt 以上
- 行数は 45 行、各行の文字は全角 23 文字
- ルビを振る場合、行間を固定値とし、値を 14.9pt とする。設定する場合「段落」→「インデントと行間の変更」→「行間」から指定する。

また、フォントについては以下のように設定している。

- タイトル、見出しのフォントは MS ゴシック +Arial
- 本文のフォントは MS 明朝+Times New Roman、強調は MS ゴシック

3.2 Writing in English

This paragraph shows an English sample. There is no problem with writing your manuscript in English. If you write in LaTeX, please use the distributed document class with the english option:

`\documentclass[`

ⁱⁱ 複数行にわたる見出しへについては LaTeX 版サンプル文書の付録 A.1 を参照。

```

plate, dvipdfmx, english]{nlp2026}
Any changes on the document class (.cls) are
prohibited. If you write in Microsoft Word, please use
the distributed sample file without changing its layout.
Using "Times New Roman" is suggested.

```

なお英語での原稿作成について、LaTeX 版の場合は配布する文書クラスを用いて記載すれば問題ない。Word 版の場合は配布テンプレートを用いて、レイアウト等については変更しないこと。本文は、文書クラスで規定される通り Times New Roman で記載のこと。

3.3 図, 表, 例文等

図, 表, 例文等, 本文とは独立に表記される領域における文字サイズも, 基本的には本文と同じ 10pt を推奨する。

ただし, 図や例文などは, 別のツールで作成したオブジェクトを原稿に埋め込むため, 中の文字の正確なサイズを知るのは難しいと想定されるので図中のフォントサイズは規定しない (10pt 以下の文字サイズがあっても規定違反とはしない)。ただし, A4 印刷で読める大きさは担保するように留意すること。

表に関するも, 情報を多く記載する必要性がある場合, `\small(9pt)`相当のフォントサイズまでは必要であれば利用しても良いこととする。また, `\tabcolsep`などを使って各セルの横方向を詰めることは許容する。ただし, 詰めすぎて読みにくくならないように留意すること。

3.3.1 図の挿入



図 1 何らかの図

図のキャプションは図の下につける。図 1 は実際の挿入例である。

LaTeX 版 図の挿入は通常 `graphicx` パッケージによって行う (図 1 参照)。クラスオプションにワープロ (dvipdfmx 等) を指定していれば, 各パッケージを読み込む際に何度も同じオプションを指定する必要はない。

Word 版 図の挿入は「挿入→図の機能」によって行う。図を挿入する場合, 挿入した図を選択した

際に表示される「図ツール」の「文字列の折り返し」から, 「上下」を利用する。また, 「参考資料」から「図表番号の挿入」を選択し, 図表番号と同時にキャプションを付与する。

表 1 適当な表

日本語	Japanese
英語	English

3.3.2 表の挿入

図とは異なりキャプションは表本体の上に付ける。表 1 は実際の挿入例である。表 2 は表 1 のフォントサイズを `\small(9pt)`に変更した表である。

LaTeX 版 表は `\begin{table} ... \end{table}` の環境を使う。

Word 版 表組みも Word の「挿入」から表を追加できる。また, 図と同様に「参考資料」から「図表番号の挿入」を選択し, 図表番号と同時にキャプションを付与する。なお, Word 版においてはフォントサイズを 9pt としてもあまり大きく余白を詰めることはできない。

表 2 適当な表 (small バージョン)

設定	データ 1			データ 2		
	Pre.	Rec.	F1	Pre.	Rec.	F1
config1	23.04	30.11	25.60	23.04	30.11	25.60
config2	23.04	30.11	23.04	23.04	30.11	23.04

3.4 謝辞

謝辞は, 本文の直後に配置する。NLP2022 より, 謝辞は本文とはみなさないと決定したことにより, 本文 4 ページ以内に含める必要はない。よって, 参考文献のページに含めても良い (つまり 5 ページ目に記載してよい)。また, 謝辞はなくてもよい。

3.5 参考文献

本文または謝辞の直後に, **参考文献**のセクションを設け, 本文の中で参照した参考文献の詳細を列举する。本文中の参照は [1] や [2, 3] といった数字で表記し, その数字に合わせて参考文献を記載することを推奨する。ただし, 参考文献セクションの体裁については厳密に指定しない。著者の裁量で独自の参考文献のスタイルを用いることができる。年次大会の推奨設定は以下とする。

```

\$bibliographystyle{junsrt}
\$bibliography{j_yourrefs}

```

また、参考文献が1ページに入りきらない場合、参考文献は独自のスタイルを用いて良いので、フォントサイズを小さくするなどして対応すること。

```
\renewcommand{\bibfont}{\footnotesize}
LaTeX 版の本文で参考文献を参照する際には,
\cite{Article_01}といった形式で参照する。著者の名前は、略記はせずにフルネームを記載することを推奨する。
```

以下、参照の参考例である。

- 論文誌の参考例 [2]
- 本の参考例 [3]
- 国際会議の参考例 [4]
- 技術報告の参考例 [5]
- Web ページの参考例 [6]

Word 版では「参考資料→引用文献の挿入」を利用することを推奨する。引用の方法は、ISO 690: 参照番号を利用する。ただし、適切に番号の対応が取られていれば Word 版引用文献の機能を利用することは必須ではない。

3.6 脚注

補足情報を入れるために脚注 (footnote) を利用することができるⁱⁱⁱ。脚注はページの下部に 9pt で表記する。また、脚注は論文全体で 1 から番号をつけ、閉じ括弧などの記号を伴って、どの脚注がどこに対応するか明確にわかるようにする。脚注は本文と水平線（横線）で分割される。^{iv}なお、Word 版においては「参考資料→脚注の挿入」から脚注を利用することができるが、本テンプレートが利用している通り、脚注箇所を明確にするためアラビア数字以外の文字を脚注記号として利用することを推奨する。

3.7 付録（Appendix）

本文とは別に付録（Appendix）を1ページつけることができる。付録は、追加の実験結果や詳細な実験設定、式の証明などを著者が記載したい場合に利用することを想定しており、基本的には付録をつける必要はない。

付録に関しては、本サンプルで利用している年次大会指定のフォーマットに従う必要はない。ただし、必須要件に入っている上下左右の余白に関しては規

定を満たす必要がある。付録の本文領域に関しては、どのような形式で付録を作成するかは著者の裁量による。

付録に記載の内容は、賞選考時には考慮されない。つまり、賞選考の審査員は賞選考時に付録を読まないことを前提としている。よって、本文から付録を参照する際には、その参照がなくても本文中で議論が完結するような書き方が必要である。逆に付録の情報に基づいた議論が本文中であったとしたら、それは審査で不利に判断される可能性がある。

投稿時には、本文および参考文献に続けて付録を配置し、単一の PDF として投稿する必要がある。また、付録は付録だけで独立した 1 ページで構成する。つまり、本文や参考文献のページ数が上限に達していないなくても、付録は独立した 1 ページが上限となる。単一の原稿として作成している場合は、付録の直前で必ず改ページを行い、本文や参考文献とは独立したページとなるように注意する。

4 おわりに

投稿論文に関する規定には、必ず満たさなければいけない必須要件(2 節)と、賞選考のために満たすことを前提とする要件(3 節)の 2 種類がある。

必須要件は、論文のページ数と余白に関する規定である。必須要件を満たさない論文は不採択になる場合がある。一方、賞選考のために満たすことを前提とする要件は、賞選考コスト削減が主な理由であり、満たされていなくても不採択になることはない。ただし、一部の賞の選考過程から除外されることがある。

年次大会論文投稿用文書クラス・テンプレートを使った執筆がどうしても自己解決できない場合は、プログラム委員会まで問い合わせること。

ⁱⁱⁱ 脚注の例である。

^{iv} ツールを参照する際に脚注に URL のみで参照する事例が散見されるが、ツールに紐づく文献などを積極的に参考文献として追加することを推奨する。

謝辞

上述の通り、謝辞は参考文献と同様に、本文の4ページの中に含まなくとも構わない（5ページ目に書くことができる）。

本研究はJSPS科研費JPxxxxxxxxx, JPyyyyyyyyy, JPzzzzzzzz の助成を受けたものです。（https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/16_rule/rule.html の例を引用）

参考文献

- [1] W3C 日本語組版タスクフォース. 日本語組版の要件（日本語版），（2020-11閲覧）.
<https://www.w3.org/TR/jlreq/>.
- [2] FirstName LastName. Title of the article. **Journal of Natural Language Processing**, Vol. 13, No. 1, pp. 251-258, 2006.
- [3] FirstNameA LastNameA, FirstNameB LastNameB, FirstNameC LastNameC, and FirstNameD LastNameD. **Title of The Book**. The Association for Natural Langauge Processing, 1988.
- [4] 著者氏名1, 著者氏名2, 著者氏名3. 論文タイトル. プロシードィングスの名前, 1986.
- [5] 著者氏名1, 著者氏名2, 著者氏名3, 著者氏名4. 技報タイトル. Technical report, 出版者, 1985.
- [6] 著者氏名. ホームページタイトル, 2017.
<http://www.pluto.ai.kyutech.ac.jp/NLP/>.

付録のサンプル

A 付録

「箇棒め、うちなんかいくら大きくなつて腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癩に障った様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとびく付かせてあらかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になったのはこれからである。その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焰を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向って下のごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹とった事がある」智識は黒よりも余程発達しているつもりだが腕力と勇気とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はしていたものの、この間に接したる時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事実は事実で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思ってまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突張っている長い髭をびりびりと震わせて非常に笑つた。元来黒は自慢をする丈にどこか足りないところがあつて、彼の気焰を感じたように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近付になってから直にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いつその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とつたろう」とそそのかして見た。果然彼は墙壁の欠所に呐喊して來た。「たんとでもねえが三四十はとつたろう」とは得意氣なる彼の答であった。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえなるほど」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って椽の下へ這い込んだら御めえ大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思いねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちってけども何鼠の少しきいぐれえのものだ。こん畜生って氣で追っかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやつたね」と喝采してやる。「ところが御めえいざつてえ段になると奴め最後つ屁をこきやがつた。臭えの臭くねえのってそれからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至つてあたかも去年の臭氣を今なお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を付けてやろうと思って「しかし鼠なら君に睨まれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息している。「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたって——てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番じや誰が捕つたか分らねえからそのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壱円五十銭くらい儲けていやがる癖に、碌なものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てもあの体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟はわかると見えてすこぶる怒つた容子で背中の毛を逆立てている。吾輩は少々氣味が悪くなつたから善い加減にその場を胡魔化して家へ帰つた。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食つよりも寝ていた方が気楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。